



母子生活支援施設における母親のエンパワメントプログラムの開発

石崎, 和美

朴木, 佳緒留

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 7(2):191-201

(Issue Date)

2014-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81006280>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81006280>



母子生活支援施設における母親のエンパワメントプログラムの開発

Development of Mother's Empowerment Program in Mother / Children Support Facility (DV Shelter)

石崎 和美* 朴木 佳緒留**
Kazumi ISIZAKI*, Kaoru HONOKI**

要約：母子生活支援施設に暮らす母親は、DVの被害や子どもの虐待、また就労困難や経済的困窮などの様々な課題に直面している。本研究は、母子生活支援施設の母親を対象にエンパワメントプログラムを作成し、プログラムを受講した母親が、子育てや自分の人生の選択に自信を持つきっかけになると考え実践した。2009年に受講した17名の母親はプログラム受講前と受講後のアンケートには、1名を除く16名が変化があったと答えている。また1カ月から1カ月半後16名の母親にインタビューを行なったところ「子どもへの接し方」「ジェンダーの気付き」「コミュニケーションの取り方」「自己肯定感」等を中心に意識や行動に変化が見られた。これらの意識の変化がその後の生活や行動にどのような影響を及ぼしたかを考察する。このプログラムを受講するまでは隣人のことも良く知らない状況であったが、親近感を覚えるなど対人関係にも変化が起きている。また「子どもへの接し方」の変化はその後の親子関係に影響を及ぼし、子育てを楽しむ状況がみられる。また虐待をしそうな親にとっては、虐待の抑止力にいくらかはつながると考える。しかし虐待の問題は複雑で重層的な要因があり、プログラムを受講するだけでは解決にはつながらない。今後につながる支援に関わる課題である。

1. はじめに

はじめに本稿の研究対象である母子生活支援施設の概要を述べておきたい。母子生活支援施設は、1998年の児童福祉法の改正により「母子寮」から「母子生活支援施設」と名称が変わった、児童福祉法第38条¹に定められる児童福祉施設である。その目的は「自立促進のためにその生活を支援する」また「保護する」から「保護するとともに、生活を支援する」と改正された。

母子生活支援施設の前身である、母子寮は明治13年以降生活困難な母子世帯を援助する役割を担ってきた。とくに第二次世界大戦後の日本社会では戦争未亡人となった母とその子どもに居宅を提供してきたが、老朽化などを理由に1959年には652施設あった母子寮は2008年には265施設に減少している。

入所の条件は「18歳未満の子どもを養育している母子家庭、または何らかの事情で離婚の届出が出来ないなど、母子家庭に準じる家庭の女性が、子どもと一緒に利用できる」とあり、2004年の児童福祉法改正によって支援の対象者はさらに退所者にも拡大された。高度経済成長の時代に、母子家庭にも質的な変化が生じ、現在は、「死別母子家庭」のみならず、離婚や未婚などを理

由とする「生別母子家庭」が増加し、複雑でより広範な理由による入居者が増えているが、同時に当該の人々が抱える問題は住宅課題から、生活課題に変化してきた。核家族が拡大する中、不況による「夫の失業」「サラ金対策」など経済の問題や、就労の問題などが生じたためである。また現在では、2001年のいわゆるDV防止法の制定をうけて、被害者のDVシェルター（緊急一時保護）としての機能も求められている。さらに、DVと密接にかかわる児童虐待の問題、また外国人妻として日本人と結婚した人や、外国からの就労を機会に、日本で出産した外国人母子の問題など多様な問題がその背景にある。なかでも「暴力をふるう」が離婚の原因になっていることは、近年増加の傾向にあり、母子生活支援施設利用者の52.1%が、夫などの暴力が入所理由となっている。（厚生労働省2006母子生活支援施設入退所状況調査）

2. 研究目的

母子生活支援施設においては、後述するように居宅の提供や経済的支援などの公的支援や、生活支援などがすでに行われている。

しかし実際には、自立に踏み出せない者も多い。そこで本稿では、上述した外的支援だけではなく、当該者の自立する気持ちを

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究所博士課程研究生

**神戸大学大学院人間発達環境学研究所教授

(2013年10月1日 受付)
(2013年12月10日 受理)

育てるための支援策に注目する。DV等の暴力に長く晒されてきた母親と子どもには精神的回復のための支援が必要であり、現在はカウンセリングが実施されている。提供されているカウンセリングが有効でないわけではないが、カウンセリングは1対1の関係で行われるため、いわゆる「場の力」を育てることを本来的に目的としていない。後述するように、当該者は自身の存在を肯定的にとらえることができず、他者との関係性をつくりだす力をそがれている。人間関係を紡ぎだす力を回復し、日々の生活を前向きに捉えるためには、当該者の日常を取り巻く人間関係を良好なものとし、たとえば日常の挨拶を取り交わす、何気ない世間話を気軽にするなど世間一般では「普通のこと」と思われている生活環境が必要と思われる。そのような当該者をとりまく日常的な人間関係を作り出すためには、日頃生活している場（母子支援施設）がそのまま「学びの場」になる必要がある。そのための支援としてエンパワメントプログラムの開発を試みた。

エンパワメントプログラムは、参加者が他の入所者と一緒に受講することで施設内での孤立感を払拭し、子育てを楽にするヒントを得、また他の人からの発言を受けて、自分の良い所を客観的に見つめ直す機会をつくることを目的とした。施設利用者は、自分の人生が上手くいかないのは自分に問題があると考えがちであるが、それは自分個人の問題ではなく、社会とつながった問題であるということに気付くことが重要であり、実施するエンパワメントプログラムは、一人ひとりが自分の問題を社会の問題につながっていることに気づく内容も含めた。

3. エンパワメントプログラムを実施したA園の実情

A園は、1972年4月1日に、大都市圏に設置された築41年を迎える公設民営の大型母子支援施設である。市からの委託金により、福祉法人が運営を行っている。施設は鉄筋の5階建てで、常時約50世帯の入所者が生活をしている。園長は女性で、職員は23名である。夜間は、宿直の職員1名と夜間専門業務宿直員1名が配置され、24時間の支援体制を行っている。

基本方針は次のとおりである。「母親と子の権利擁護と生活の拠点として、子どもを育み、子どもが育つことを保証し、安定した生活の営みを支えます。そのために母子生活支援施設は、母と子の主体性を尊重した自立への歩みを支えるとともに、常に職員の研鑽と資質向上に励み、公正で公平な施設運営を心がけ、母と子及び地域社会から信頼される施設として支援を行うことを目指します」（A園報告書2009年「母子生活支援施設における就労支援の現状と課題」より抜粋）

エンパワメントプログラムを開発し、実践した2010年2月1日現在のA園に在籍する母親の年齢は、20歳未満から50歳代まで幅広く、47世帯中うち35歳から39歳が12人で最も多い。次いで25歳から29歳が9人である。養育する子どもの年齢は0歳から18歳までである。子どもの年齢は0歳から2歳児が23名、就学前（3歳から5歳）が17名、学童期低学年（1年生から3年生）が18名、高学年（4年生から6年生）が8名、中学生2名、高校生1名であり、計116名の母子が入所している。

利用者はA園に入所が決定するまで、複雑で多様な生活問題を抱えていたと推測される。主な入所事情は、住宅事情、夫など

の暴力、経済事情、児童虐待、家庭内環境の不適切、その他の家庭内暴力、精神科など受診、18～20歳の母、子育て不安、外国籍、療育手帳保有、精神障害者手帳保有、児童の不登校、身体障害者手帳保有等が要件として挙げられている。

経済事情は、生活保護の非受給世帯が13世帯（27.7%）、受給世帯は34世帯（72.3%）である。正規雇用は2世帯（4.3%）のみで、大半が非常勤雇用、パート雇用であり（24世帯、51.1%）、無職17世帯（36.2%）もあり、不安定な生活状況がみられる。

上記の事情によりA園の入所者は「不安定労働」層に属し、働く意欲があっても、実際に子どもを養育しながら経済的自立を実現するのは非常に困難である。就労による収入が月額20万を越えている世帯は0%であり、平均月収は10万6746円で、平均年収は128万952円となり、「全国母子世帯等調査」の母子世帯の平均就労収入171万円と比較しても低い数字である。

4. 自立につながる支援

A園の現在の支援は、母子の生活を支えるために生活支援、心理支援、就労支援、子育て支援等、多岐にわたっている。従来の支援においても、母親と子どものニーズに応えようとしてきた。

しかしこれまでの支援は、誠意を尽くしてはいるが利用者の主体性を引き出すという点では不足するところがあったと思われる。

筆者（石崎）はA園での支援者のうちの一人であるが、本エンパワメントプログラムを実施するまでの間に、A園の支援者全体が入居者本人（母親）の自立の意識、ないしは自発性を呼び起こすような支援の必要性をそれとなく感じていたと推察する。

従来の支援は当事者である母親がではなく、他者が当事者の必要性を推測的に読み取り、いわば「外側からあてがう」という形で行われていたとも考えられる。当事者（母親）が自分の人生をどのように生きるのか、自分の強みをいかすために何が必要かを自ら考えるための学びの機会を設定することが必要と思われる。

そのような学びの機会、実は日常的にかかわれるさりげない会話の中や、子どもとの生活の中にあるが、日常を学びの機会と捉えなければ何気なく過ぎてしまう。

そこで、日常の中に非日常のプログラムをワークショップの形で提供することにより、受講者が自分の生活を客観的に捉えなおすことが出来るのではないかと考えた。後述するようにプログラムを批判、検討する中でプログラムに参加した支援をしている側の指導員にも変化を期待した。

5. 研究の方法

(1) エンパワメントプログラム

母親を支援するプログラムをエンパワメントプログラムと名付けたが、他に日本で親向けに実施されているプログラムには次のようなプログラムがある。

Nobody's Perfectプログラムは1980年にカナダ保健省と大西洋4州の保健部局で開発されたプログラムで、1987年にはカナダ全土に導入された。0歳から5歳までの子どもを持つ若い親、ひとり親、孤立している、所得が低い、または十分な教育を受けていない親を対象に実施されている。日本では2002年にカナダ

のテキストが翻訳されたことをきっかけに、2004年から0歳から5歳の子どもを持つ親すべてを対象に実施されていて、週1回2時間で6～10回のセッションで行われる。現在では広範に行われていて、完成されたプログラムと言えるかもしれないが、日本では0歳から5歳までの母親一般を対象としているため、カナダで実施されているような若い親やひとり親、また所得の低い親などプログラムを必要としている親に届けられているかは疑問である。

STAR Parentingは、親が自分も大切に、楽しみながら子育てをする方法としてエリザベス・クレアリーが開発し、アメリカカナダで実施されている。日本では、2001年にファシリテーター養成講座が実施され、親や教師を対象に実施されている。

しかし実際に養成講座に参加できるのは、限られた期間に合せて時間が取れる人に限られてくる。またプログラムが実施される場所に出向いていかななくてはならない。どちらかといえば特定の事情をもつ親というより、一般的な親に提供されている。

MY TREEペアレンツプログラムは、子どもを虐待してしまう親の回復支援のために、2001年森田ゆりによって開発された。2001年から2012年の間に550人の修了者がいる。1回2時間15回のセッションで構成される。子ども家庭支援センターなどでも実施されているが、前述のプログラムと同様に限られた時間に実施されている場所に出向いていくには、交通費がかかるなどの経済的負担や、15回の長期の参加が困難になる場合も生じてくるだろう。

びーらぶ (beloved) プログラムは、DV被害を受けた女性とその子どもたちに対する同時並行心理教育プログラムで、暴力被害を受けた子どもや女性たちが同時並行してプログラムに参加することによって、「自分自身が大切な人であること」、「暴力を振るわれる必要はないこと」に気づき「本来の自分の力やすばらしさ」を取り戻していくこと、「自分自身の感情」を取り戻し、健康なこころと身体を育み、対等なコミュニケーションスキルを学び、暴力を選択しない方法を身につけていくことを目的として、2006年から東京都内で実施されている。親子で別室にて同時に受講という試みは多くは見られないが、やはり12回欠席せずに参加することと交通費などの経済的負担は大きい。

以上挙げた他にも様々なプログラムが導入されており、近年プログラムの実施の数は増えてきたといえる。目的も親のエンパワメントである点は共通している。しかしこれらのプログラムを受講するには、実施場所まで足を運ぶ必要があり、さらに仕事を持つ母親には受講が困難な時間帯の場合が多い。また交通費や、場合によっては受講費が発生するため経済的負担も余儀なくされる。中には施設での実施も試みているプログラムもあるが、1度の受講だけでは母親の解放につながるかは疑問である。プログラム受講後も継続して支援を行うことが必要と考える。

母子生活支援施設内で行う利点は、母と子が生活をしている建物の1室を使用しての実施であり、時間も帰宅後の参加しやすい時間帯に設定出来る。また一人ひとりがそれぞれに抱える課題を実践者とオブザーバーが把握しており、受講後も支援が継続できることである。

(2) エンパワメントプログラムの内容

エンパワメントを発達させる方法として、グティエーレス(1987)は①自己効力感を高める、②自己非難を軽減する、③変化に対する個人的責任を引き受ける、④集団的・批判的な意識を発達させる、の4つのプロセスを示している。

プログラムは、1回2時間の実施を週1回の全5回とした。参加者同士の信頼感を高め、親近感が芽生えるようにゲームなどを取り入れてワークショップの手法で行った。

ワークショップを取り入れたのは、教師が一方的に教える学習ではなく、参加者が相互に学び、学習者でありまた教育者となる学びの場と考えたからである。個人の体験が参加した人に広がり、共有することによって新しい意味づけが構成される効果を期待した。とくに振り返りは重要と考えて短い時間ではあるが、毎回終了前に参加者一人ひとりが感想を述べる形で行った。

(3) 参加者の募集

プログラムを実施するにあたり、母子指導員とどのような人に参加してもらうかについて丁寧に話し合った。精神的な回復途中にあり、対人関係に不安を抱く人はかえってストレスになるかもしれない、と考え参加案内をしなかった。対象の枠として「子どもの年齢」と「仕事をもつ母親」に分けることになり、参加候補者には母子指導員から声をかけてもらった。声かけの結果参加者は次のとおりである。

- ・0歳～2歳の子どもを持つ未就労の母親6名
- ・学童期の子どもを持つ母親6名(兄妹に幼児がいる人も含む)
- ・仕事を持つ母親8名

(4) エンパワメントプログラムの実施期間

プログラムの実施期間は、2009年5月13日から12月11日にそれぞれの対象グループに全5回行った。

(5) エンパワメントプログラムの実施と振り返り

・対象者と期間

①0歳～2歳の子どもがいる未就労の母親 6名

2009年5月13日から6月30日毎週水曜日午前中

②学童期の子どもを持つ母親(幼児を含む) 6名

7月24日から9月4日毎週金曜日の19時から20時30分
(途中行事があったため不規則になった)

③仕事を持つ母親 8名

11月6日から12月11日毎週金曜日の19時から20時30分
(11月27日は行事のため12月4日に実施)

それぞれのグループを対象に、5回の実践を3クール行った。オブザーバーとして参加するのは母子指導員、カウンセラー、ファシリテーターは筆者(石崎)である。

母親に提示した目的は、「日常を離れてゆっくりとした時間を過ごし、新しい自分の発見、子どもとの関わりをよりよくしよう」である。プログラムは「ゆったりたいむ」と名付けた。

0歳～3歳児はワークショップの時間、保育室で保育士による保育をお願いした。

毎回プログラム実施後には母子指導員、オブザーバー、筆者で

30分から40分かけて参加者一人一人の様子を中心に、プログラムの詳細や内容をICレコーダーと進行予定表に記録して、後に改めてこまかく記録し批判、検証を行った。

・プログラムの実際

各回の始まりは、チェックインである。入室と同時にワークショップが始まっていると考え、自分の好きな名前で参加する、音楽を流すなど緊張をほぐす工夫をした。

プログラム終了後は、毎回短いティータイムをもった。日常に戻る前のひと時であり、自分自身を語る場でもある。

第1回目には「安心のワーク」を実施した。過去に最も安心であった時のことを思い出し、絵に描く作業を通して安心の実感を促す。目的は参加者に安心してもらうことである。リラクゼーションによって安心のイメージをふくらまし、クレヨンで安心の絵を描く。絵を描いた感想をそれぞれに話してもらう。

第2回目は、ルールの確認とアイスブレイキングとゲームをしてから、「傾聴」をテーマに聴く練習を行った。ペアになり最近の気持ちを聴きあう。

第3回目は「ジェンダー」がテーマである。ホワイトボードに女らしさ、男らしさのイメージを出してもらい、女性を表す言葉と男性を表す言葉を出し、過去からのジェンダー規範や日本独特のジェンダーについて話し合った。

第4回目は「アサーティブ」である。ロールプレイを見た後、自分のコミュニケーションパターンを考えてもらう。最近「腹の立ったこと」をお互いに傾聴をした後、内容を実際に劇に仕立ててやってみる。周りで見ている人は異なる介入方法を思いついたときに、交代して劇に参加する手法を用いた。

第5回目は自分の短所について、視点を変えて長所に書き換える。自分では長所と思えないことを参加者同士で考えて長所にする。その後、一人ひとりが参加者全員から一言ずつほめてもらう。最後のゲームとして、布を広げて音楽に合わせて、協力をして歩いたり布にひとりずつ包みこんだりした後、生花の花弁をいれる。終了後には5回の卒業のしるしと、感謝の意味で参加者に小さな花束を持ちかえてもらった。

・参加者の様子と感想

①0歳～2歳の子どもをもつ未就労の母親 6名

2009年5月13日から6月30日毎週水曜日午前中

ワークショップの時間：10時から11時30分

就業していない人が対象のため午前に実施した。(未就労の場合、普段の子どもの世話は母親がすることになっている。ワークショップの時間は保育をお願いした。)

お茶の時間：11時30分から11時50分

1回目「安心のワーク」の回では初対面の人が多く、緊張している様子が見られた。母子指導員2名とオブザーバーが積極的に自分のことを話す内に、徐々に自分のことを話し始める。ゲーム「なべなべ底抜け」はこれまで体験したことがない人がいて、「どうやるの？」と初めての経験になった。安心の体験を思い出す中で、自分が「病んでるかもしれない」と話す場面があった。「楽しかった」の感想が多い中、人と何かをするのが苦手と感じていた人もいた。

2回目「聴く・話す」の回では少し打ち解けてきて、ゲーム「自

己紹介」では思い切って「私が一番にやります」と申し出る人があり、初めは照れながらもだんだん楽しそうに自己紹介をするようになった。

内容に関しては「話すのが苦手だけれど出来た」「ゲームが楽しくてすっきりした」「子どもと離れることでゆっくりできた」等の感想であった。

3回目「私らしさを大切に」の回では、安心のためのルール「参加」「尊重」「守秘」に加えて自分に「正直」でありたい、とルールの追加を希望された。

女性に生まれて損をしたと思うことの感想は、「子育ての負担」「自分の時間がない」「起きている時は自分以外のことばかり」「家事が大変」「対価が得られない」「自分の考えが通らない」「妊娠の負担」であった。良かったことは「花柄、レースが身に付けやすい」「子どもが産める」「おしゃれが出来る」「レディースデイがある」であった。

4回目「自分の気持ちを言葉にしよう」の回では、「子どもと言い合いになって、なかなか言うことを聞かない。自己主張が激しくなって難しい」と話す人がいて、アサーティブコミュニケーションの方法を使って、実際に話し方を練習してみることで「そうか、まず相手の気持ちを聴けばいいのか」と気付く場面があった。

5回目「自分を好きになるために」の回では、第1回目に比べて打ち解けて、参加者同士が活発に話す場面が見受けられた。自分の短所を長所に書きかえるにあたり、「私は以前自分がだめだと思っていたけど、このプログラムを受ける前にカウンセリングを受けていて、自分に力があることに気づいて、それから自分が好きになった」と話す人がいた。

また一人ひとりがほめてもらうところでは、「なんだか感激しました」「ほめてもらってうれしい」という感想があり、終了に際して「楽しかった」「またこんなやってみたい」「普段と全然違ってよかった」とプログラムに対してのコメントが得られた。

②学童期の子どもを母親 6名

2009年7月24日から9月4日毎週金曜日の19時から20時30分

仕事を持つ人4名と未就業の人2名が対象である。

1回目「安心のワーク」の回では、すでに顔見知りの人同士で打ち解けた様子で、始まる前から盛り上がりを見せていた。それぞれに冗談を言い合う等、少なからず信頼関係が取れている様子がみられた。ゲームの時も笑い声が湧きあがり、積極的に楽しむ姿勢があった。

2回目「聴く・話す」の回では全体のテンションが高く、ちょっとしたことで笑いが起こる。カウンセラーが見せるわざと聴いていないロールプレイの感想は、「一生懸命しゃべっているのに聴いてもらっている気がしない」「私ならとくに喋るのをやめている」「ふたりともおかしいKYだ。聴いていないのに話し続けるのもヘンだし、全く気持ちが無いなら初めに『聴きたくない』と言うべきと思う」「これとおんなじ状態を経験した。どちらも一方的に話していて、ものすごい勢いでしゃべっていた。でも言いたいことを言えたら(相手が聴いていなくても)すっきりする」等の感想があった。

しっかり聴くロールプレイの感想は「目を見て話すのは大事だけれど目だけでなく、全身で聴いている空気を出すととても聴いてもらっている気持ちになって、話しやすいと思う」「私ならもっと突っ込みを入れて話のキャッチボールをする」「言葉も気持ちもキャッチボールができていた。さっきのとは全然違う」などの感想があった。

終了時の感想は、「楽しかった」「今日もよくやった」「わくわくする」であった。

3回目「私らしさを大切に」の回では、女に生まれて大変だったこととして、「家事をしないといけない」「女は家事、男は仕事と決められている」「上から目線、家事育児当然」「女性が被害に遭う」「給料安い」「役職がつかない」「面接で子どものことを聞かれる。男には聞かない」等が挙げられた。この回では男性の母子指導員が参加していたため、男に生まれて大変だったことを挙げてみた。「修理ができると思われる」「ゴキブリ殺してと言われる」「屋根に上ってといわれる」「飲めない酒を飲まされる」「性同一性障害の場合仕事に限られる」などがあった。

また女に生まれて良かったことは、「ウエディングドレスが着れた」「出産できた」「化粧、おしゃれができる」「おごってもらえる」「授乳が最高・妊娠の喜び」「母子手帳がもらえる」「レディースデイがある」「髭がない」。

男でよかったは「恰好が雑でもいい」「生理がない」「日焼け気にしない」「スッピンでいいからぎりぎりまで寝てる」などである。

終了時の感想は「楽しみだった」「元氣玉(ゲーム)で体がカーツとなった」「すっきりした。子どもがいない解放感」「場に慣れて、緊張しないでいた」「もっと、もっと思いつきはじけたい。不完全燃焼」「性同一性障害がよくわからない」「男らしさ、女らしさが面白かった。おだやかな気分になれる」であった。

4回目「自分の気持ちを言葉にしよう」の回では、入室時から笑いが起こり、自分の呼んでほしい名前を変える等、楽しもうという様子が見られた。

アサーティブを学ぶにあたって、最近腹の立ったことを挙げてもらおう。「電車を降りようとしたら、向こうがぶつかったのに『ちえっ』とか言われて、信じられなかった」「朝から子どもを叱りつける声がすごくて本当にいらいらしてしまう。朝からやめてって思うけど何も言えない」この事例を元にロールプレイを体験する。

体験した人は「あー、何かわかった。人によっては言われたことがすんなり入ってくるけど、違う人から言われたら受け入れられない」「実際の場面で使えるかは分からないけれど、次にその人に合う時には違う声かけが出来るかもしれない」と感想を述べる。

終了時の感想は、「楽しかった」「今日は体を使うのが中心で楽しかった」「形でしりとり(ゲーム)は思いがけない形になっていくのが面白かった」であった。

5回目「自分を好きになるために」の回では、自分が短所と思いきりこんでいることを長所に置き換えるにあたり、もともと顔見知りであることも影響して、参加者同士がお互いに客観的に長所を述べ合う姿が見られた。

最後のゲーム、フラワーシャワーは大変盛り上がり何度も何度も

も花卉をかけあう様子があった。

最後の感想は「こんなの初めて」「気持ちいい」「嬉しい」「最高」等であった。

③仕事を持つ母親 8名

2009年11月6日から12月11日毎週金曜日の19時から20時30分

この回では、母子指導員とオブザーバーに加えて実習生も参加した。

1回目「安心のワーク」の回では、知り合いが多い様子で入室した時から笑い声が絶えなかった。

「自己紹介」のゲームでは知り合いもいる中、あえて実施すると「えーっ」「何?」「びっくり」と笑いが絶えず起こり、和やかな雰囲気になった。外国籍の人が2名参加していたので母子指導員がわかりにくい日本語をフォローした。外国籍の参加者に日本とは文化が違うところを質問してもしる場面があった。

2回目「聴く・話す」の回では、「聴いていないロールプレイ」を見た後「ものすごく変」「話しにくそう」「不自然」「ありえない」等の感想があり、聴き合うワークのあとは美容師を職業にしている人が参加していてその人の嬉しかった話で盛り上がる。一人の参加者が「実はこのヘアスタイルもしてもらったんです」と話す。他の参加者から「よく似合っている」「上手いね」「さすがプロ」「子どもを連れていける美容室は貴重」と声上がる。

終わりの感想は「初めての体験」「子どもに戻った感じ」「こんなことをしてもいいんだ」「いやだって言ってるのに(新聞ちぎりゲーム)無理やりかけた(笑い)」であった。

3回目「私らしさを大切に」の回では、女らしい、男らしいを出した後、外国籍の参加者から「日本は私の国とはずいぶん違います。お父さんも家事や育児をするのはあたりまえです」また「家のことを決めるのも夫婦が話しあって決めています」「日本と違い私の国では、中絶はいけないとされています」の意見が出て、多角的に話し合うきっかけになった。

終わりの感想は、「今日のメニューはハードではなかった」「まともになってきたありがとう」「ソフトになった。ゆったりたいむのネーミングがぴったり」「楽しかった」「一緒に何かできてうれしい」などであった。

4回目「自分の気持ちを言葉にしよう」の回では、参加直前の出来事を、「さあ食べようとしたスパゲッティを子どもに運ばせたら、テーブルに着く前にこぼした。『うわーなぐりたい』と思ったが、自分に『落ち着いて』と言い聞かせて、子どもに『大丈夫?』と声をかけて後片付けをした。子どもには『どうすればよかった?』と話ができ、自分の感情の処理ができた」と話す人がいた。

終わりの感想は、「次々とゲームが出てきておもしろい」「慣れてきました」「ハードル高くなかった」「程良く疲れました」「歌以外は楽しかった」「いつも楽しい、ありがとう」であった。

5回目「自分を好きになるために」の回では、短所を長所に書き変えた後、一人ひとりがほめてもらう体験をした。

それぞれの感想は、「嬉しい」「あつい!こんなこと言われたの初めて、気持ちが熱くなる」「とても嬉しい」「ありがとう、心が熱くなります」「こんなこと言ってもらったのは初めて、どうし

よう泣きそう」「泣いたらいいよ」と別の参加者の声かけで、泣きそうといった人も、ほかのみんなももらい泣きする。

終わりの感想は「実は（人と）目を合わせるのが苦手で、だけど今日は目を合わせることができた」「うれしい、ありがとう」「楽しかった」であった。

(6) アンケートによって母親の変化をみる

プログラムの初めに母親が現在おかれている状況を知るために、プログラムの初回に次の項目でアンケートを行った。

①家事や子育てをしていて大変だと感じることがありますか、(気持ちの上で) (生活の上で)、②子育ては大変だと思いますか、③自分は何をやっても上手くできないと落ち込むことがありますか、④自分の気持ちを伝えるのが苦手ですか、⑤相談できる人はいますか。いとと答えた人へそれは誰ですか、⑥これまでに女性だから不利益を受けたと思うことがありますか、⑦自分はコミュニケーションが苦手だと感じていますか。

プログラム終了時にはプログラムを受講して何らかの変化があったかを知るために、次の項目でアンケートを行った。

①プログラムを受けて何か変化はありましたか (気持ちの上で) (生活の上で)、②子どもに接する上で何か変わったことはありますか。あると答えた方は変わったところを具体的に教えてください、③子育ての悩みを聞いてもらえる相手はいますか。いとと答えた方へそれは誰ですか。さしつかえがない範囲で教えてください、④イライラした時何か解決する方法がみつかりましたか。見つかった方へそれはどんな方法ですか、⑤今の社会では女性が不利益を受けるのはしかたのないことだと思う。不利益を受けてもしかたがないと答えた方へなぜそう思うのか簡単に書いて下さい、⑥同じ悩みを持つ仲間がほしいですか、仲間がいると何かしたいですか、それはどんなことですか、以上の項目でアンケートを実施した。途中、諸事情で3名がぬけたのでアンケートの回収は17名である。

以下に同上アンケート結果を基にして、プログラム受講後の母親の変化をみたい。

<0歳児から2歳児の母親>

0歳児から2歳児を持つ未就業の母親は、プログラムへの参加は初め6名であった。諸事情で2名がぬけて3回目以降は4名となった。4名の状況や変化は次のようである。

初回のアンケート(2009年5月13日)は現在の母親の状況を把握するために実施した。Aさんは6カ月の女の子、Bさんは2歳の女の子と小学5年生の男の子の母親である。Cさんは3歳の男の子、Dさんは6カ月の男の子の母親である。

参加した母親の状況

4名全員が子育てを「大変」と感じている。この時期の子ども(0歳から2歳)はまだ幼く、子どもと離れる時間は皆無のため、気持ちの上でも生活の上でも、子育てを負担に思っている様子が分かった。

慣れない子育てに加えて、母子生活支援施設に入所という環境の変化などによって、子どもに手を挙げてしまう様子や、子どもの泣き声にも苛立ってしまうゆとりのなさも伺える。また家事などに追われ、自分の時間がなかなか持てないなどの状況や、生活費

のやりくりで苦勞する様子も伝わる記述がある。また子どもと自分の体調にも不安を抱いている。

自分の気持ちを伝えることが苦手な人は1名、相手によっては伝える事が出来ると答えた人は3名であった。相談できる人は、生活をしている場所も母子生活支援施設に限定されていて、ごく身近な人が相談できる人であった。

女性だから不利益を受けた人は2名、受けていない人は2名であった。

コミュニケーションを苦手と感じている人が2名、苦手とは感じていない人は2名である。

参加した4名は、お互いによく知っているわけではなく。プログラムの初回に初めて知りあうといった状況であった。大型の施設のため、常時およそ50世帯の入所者が生活している。自治会もあるが月1回の定例会に顔を合わせる程度ではお互いによく知らないという状況になる。プログラムは1週間に1回およそ1カ月半をかけて実施した。

終了時アンケートにみる変化

4名全員がプログラムを受けて変化があった、と答えている。詳しい変化の様子は自由記述にかかっている。

これらの記述には、初回に行ったアンケートにはなかった「ゆとり」や「ゆったり」「ゆっくり」の言葉や、「明るさ」「楽しく」「前向き」「自信」などのポジティブな言葉が出てきている。母親の意識の変化がみられる。

また、全員に子どもへの接し方の変化がみられた。

「大事な子ども優先になりました」

「私もOK、子どももOKができるようになった」

「前よりも、もっと優しく接することができるようになった」

「これからは少しでも子どもの考えを考えながら、ゆったりとした気持ちで接しようと思った」、など具体的な記述の中で、気持ちの変化により母親にゆとりが生まれ、子どもを大切に思う思いが芽生えている。

子どもは大変な存在で世話をすることに負担を感じていたが、子どもに対する見方が「大事」「優先」「子供もOK」と変化し、「優しく」「ゆったりとした気持ちで」接する気もちになっている。

「悩みを聞いてもらえる人がいるか」の質問に対しては全員が悩みを聞いてもらえる相手がいる、と答えている。子育て中は孤立を防ぐためにも相談することが重要で、特にひとり親の場合負担が大きくなりがちである。子どもの発育や発達においても、気軽に相談が出来る体制が必要になる。初回アンケートではアンケートに答えた全員が「悩みを聞いてもらえる人がいる」と答えているので、気軽に相談できる体制を利用している様子が分かる。

ストレスを感じた時に自分自身で出来る方法についての質問に対して、全員が「みつかった」と答えている。

「ひとりごとを言う」「一度落ち着く」「ゆったりとした気持ちになる」「お菓子を食べる」など、イライラを感じたときの解消の方法をそれぞれに見つけている。

「女性が不利益を受けるのはしかたがない」の質問に対しては「諦め」があり、「不利益はある」が少しでも女性の暮らしやすい社会を望む記述があった。

「自分の気持ちを伝えるのが苦手ですか?」の質問では、この

グループは初めて出会った人達であったため、思い切った表現が苦手な様子が伺えた。はずかしさから一回目の集まりの時にはゲームなどはパスをする人が多かったが、回を重ねるうちに徐々に打ち解けていった様子が、「本当にこの時間が楽しみで」「笑って悩みを解決」などの記述に表れている。人との交わりを通して「自分のことがいろいろ分かるようになってきて楽しい」と感じられたのではないだろうか。

プログラム受講後の変化

最終回に行ったアンケートによると全員の参加者が、変化があったと答えている。気持ちの変化としてはゆとりが出来て明るくなり、子どもと接する時には一呼吸をおいて接するようになっている。また24時間ほとんど離れる事の出来ない子どもをプログラム実施の間は保育をしてもらい、プログラム実施の2時間足らずだけでも離れる事が気分転換となった。その結果、子どもとの関わりが変化している。

母親になると自分の時間が持てないばかりか人間の基本的欲求である「食べる」「寝る」「トイレに行く」などが自由に出来ないため、フラストレーションが溜まりやすい。また育児などにおいて「母親だからあたりまえ」などの固定的な役割意識に縛られ、誰にも認められない苛立ちは、ともすれば「子どもに当たる」などの行動を生みだすかもしれない。今回のプログラム実施により、「子どもと離れてワークに参加する」わずかな時間は、母親の「この時間が楽しみ」の言葉にあるように気分転換にも効果的であった。

<学童期の子どもを持つ母親のグループ>

2009年7月24日から9月11日までにワークショップを受けた母親は初め6名であったが途中で引越しのため最終的には5名となった。

このグループは働いている母親も多く、帰宅時間に合わせて午後7時から実施した。夕方は子どもたちの食事、入浴（共同のため時間制限がある）など慌ただしい。しかし各自が時間のやりくりをして、毎回積極的に参加している。参加者と子どもの学年は次の通りである。Eさん小学6年生女児。Fさん小学2年生女児。Gさん中学1年男児と5歳女児。Hさん小学5年生男児と3年生女児。Iさん小学1年生男児、5歳男児。

参加した母親の状況

学童期の子どもと幼児を持つ母親で、さらに仕事をもつとなると当然時間に追われる生活となる。また子どもたちだけで、帰宅の遅い母親を待つこともしばしばである。仕事をこなし食事の支度や洗濯など、生活は慌ただしい。子どもが成長することで、乳幼児期とは違い「世話をする」大変さは軽減されているが、思春期や反抗期を迎えて、意見の対立や不登校などの問題も出てくる年代でもある。

「何をやっても上手いかなないと落ち込む時がありますか」の質問に対して激しい落ち込みはないものの、上手いかない苛立ちがうかがえた。

気持ちを伝えることの苦手意識は人によって様々であった。自分では苦手と感じているが、プログラムの中では積極的に参加者同士で談笑する場面もあり、プログラム終了後の短いお茶会では話し足りないと感じているようであった。

日常的に気軽に相談できる体制は非常に重要であると考えられているが、このグループは仕事を持つことで「時間が無い」や、朝早くから夜まで仕事のため施設にいないことから「入所者でも顔も知らない人がいる」と話す人がいた。自治会活動の役員を引き受けた事で親しくなった人もいたが、参加者8名のうちの2名から3名程度であった。

ジェンダーに関する質問では4名が不利益を受けたと感じている。参加者のうち3名はDV被害を受けて入所している。社会で働く中では、「パートのくせに」「面接で子どものことを聞かれる」「電話の応対に差をつけられる」など、男性には質問しないようなことを聞かれて不愉快な思いをしたと答えた人もいた。

コミュニケーションに関しては、1名が出身地との言葉の壁を感じている様子であった。他の参加者は、むしろコミュニケーションを得意としている様子であった。

プログラム受講後の変化

プログラム終了後、全員変化があったと答えている。気持ちの上では、「明るくなった」「へこまない」「楽になった」「おだやかになった」「笑える」「心のゆとり」「ゆったりたいむ（プログラムの名称）を楽しみにする気持ち」「来ている人との会話が楽しみ」「心が和んだ」、などの記述があった。

生活の上では子どもと「名前を呼び合って」楽しむなど、プログラム受講の時間には子どもと離れる事が出来るので、「叱らないですむ」ゆとりが生まれている。また「(子育てや日常を)楽に考える」記述があった。

子どもに対する変化では、1名を除いて「ある」と答えている。具体的には、「こまかい事には目をつむる」おおらかさや、「子どもをほめる」「子どもにも（楽な）考え方を教えたい」「子どもの身になってことばもかわった」、などの変化がみられる。

初めのアンケートでは、相談できる人が「いる」と答えた人は4名であった。相談できる人が身内、友人などであったが、「入所者の中に相談できる人がいる」に変化している。イライラした時に解決する方法が、「みつかった」人は4名であった。「まず一息」「プラス思考に」の他に、「あきらめる」ことも方法としている。

女性だから不利益を受ける社会と思う人は1名、不利益を受けても仕方がない、と考えている人は1名であった。自分の人生に照らし合わせて、女性であるがゆえに受けた不利益が、「ぱっとしない人生」という言葉に表されている。また「仕方がない」と考える人は、何もかも周りのせいにする「女性の甘え」にも言及している。

自己表現に関して楽しかった理由として、「いろいろな感じ方」「意見」を認め合う多様性や、「否定されない安心感」があった。「間違った答え、とんちんかんな答え」もOKであり、聞いてもらえる雰囲気があった、と記述されている。同じ悩みを持つ仲間がほしいと答えたのは3名、欲しいとは思わないが2名であった。子どもが成長することで悩みの内容も変わってくる。また子どもの個性によっては、母親との対立も起こりやすい時期でもある。同じ母親の立場にあることで共感を得られる存在は大きいと考える。

<仕事をもつ母親対象のアンケート>

仕事をもつ母親のグループの子どもは、小学2年生から2歳ま

での年齢の子どもたちである。子どもが3人いる人が1名、2人いる人が1名、後の6名は子どもが1人である。Jさんは5歳女兒、Kさんは4歳女兒、Lさんは小学2年男児、Mさんは2歳男児、Nさんは小学1年男児、Oさんは4歳女兒と2歳男児、Pさんは小学2年男児、小学1年女児、3歳女兒がいる。あと1名はワークには参加したが、仕事が忙しくてインタビューの時間がとれず、インタビューは実施出来なかった。

参加した母親の状況

仕事をもつ母親の状況は、仕事と家事の両立が大変である。勤務を終えて帰宅するなり、子どもの世話、食事の支度、入浴（共同の浴場なので時間制限がある）など、やらなければならないことが次々にある。子どもが幼い母親ほどその負担は重い。また兄弟が多い場合は助け合う場面もあるが、それぞれが母親を独占しようとするなど、スムーズに家事が進まないというジレンマもある。

仕事をもつ母親の場合、子育ては大変だと思いますかの質問に対して、「よく思う」1名、「思う」3名、「あまり思わない」4名であった。子どもの年齢も関係しているが、仕事をしていることで生活にメリハリが付き、子どもと離れる時間があることで、「子育てが大変」という思いは、0歳～2歳の子どもをもつ母親よりは少ないようである。

自分が何をやっても上手くできないと落ち込むときが「時々ある」6名、「あまりない」は2名であった。

自分の気持ちを伝えるのが苦手「はい」が2名、「相手による」が6名であった。

相談できる人はいますかの問いには、全員が「いる」と答えている。その相手は母親、姉、兄などの身内、友達、職員で、入所者は「相談できる人」として挙げられていない。

「これまでに女性だから不利益を受けたとおもう事はありますか」の問いに「ある」と答えた人が6名、「ない」が1名、「わからない」が1名であった。このグループでは圧倒的に「ある」が多かった。

コミュニケーションを苦手と感じている人は2名、それほど感じていない人は6名である。

プログラム受講後の変化

プログラムに参加したことで変化は「あった」が7名、「なかった」が1名である。気持ちの上での変化は「楽しい」「自分が大切」「イライラが少なくなった」「心が軽くなった」など、ストレスの軽減や、「素直に楽しめる」「明るくなった」「へこまない」などの記述があった。

生活の上での変化は、外国籍の参加者は「日本語頑張った」とあり、他には「(がんばりすぎないで)手を抜いてもいい」などの記述があった。また「いつもと変わらない」との記述もある。

子どもに接する上での変化は「ある」が4名、「ない」が4名で半分の母親に子どもに接する上での変化があった。

具体的には、「子どもに楽しく接する」「一方的に怒っても子どもだけが悪いと考えてはいけない」「ゆったりした気持ちで話しが聴ける」「こまかいことには目をつむる」などの記述があった

子育ての悩みを相談する人の中に、初めのアンケートでは入所者は入っていなかったが、終わりのアンケートでは「園のママ友」

「利用者」「指導員」と答えた人が8名に増えている。

イライラした時の解決方法が「見つかった」は7名、「みつからなかった」1名である。方法は「ラジオを聞く」「子どもと遊ぶ」「面白いこと（プログラムでの出来ごと）を思い出す」「相手の気持ちを考える」「深呼吸」などである。

女性が不利益を受けても仕方がない、と思う人は3名であった。「子どもがいると仕事に支障がある」「男性の官僚が多く女性が不利になるのは封建制度の名残である」「DV」などの記述があった。

同じ悩みを持つ仲間がほしいですか、の質問は「思う」3名「思わない」3名「わからない」2名に意見が分かれた。

仲間と「話がしたい」「悩みを話し受容してもらおう」「相談できる」の反面、やはり悩みは「大変」とする意見もあった。

(7) インタビューによって母親の意識や行動の変化をみる

プログラムの終了後、およそ3週間から1カ月のうちに一人ひとりへのインタビューを、1時間から2時間をかけて行った。期間をあげたのは、エンパワメントプログラムが母親の意識や行動にどのような影響を及ぼしたかを知るためである。インタビューの実施は、仕事の都合で1名が出来なかったため16名であった。プログラムの開始時に、終了後にはインタビューを行いたい旨と、プログラムの実践を客観化するための研究協力をお願いした。インタビューの内容は、了承を得てICレコーダーに記録し、テープ起こしを行った。インタビューはお茶を飲みながらリラックスして①プログラムの感想、②子どもへの接し方の変化、③コミュニケーションのとり方の変化、④ジェンダーについて、⑤自己肯定感、の5項目の内容を質問し、自由に語ってもらうように心掛けた。人権に配慮した上で、話された内容を論文にて公表することを書面により同意してもらった。以下はインタビューで話された内容の抜粋である。

①子どもに対する変化

Bさんのインタビュー(2009年7月31日)0歳から2歳の母親

Bさんはプログラム当日にたまたま事務所に居合わせ、自分の方から「2歳の子どもがいるから自分も受ける」と受講に至った。小学5年生の男の子がいて、参加者の中では子育て経験が豊富なこともあり、リーダーシップを発揮する場面が多くあった。

「10代は壮絶だった。20歳でもう子どもがいたし、逆に平凡じゃなくて複雑な家庭だったからこそその知恵も経験もある。今は良かったと思える。ここ2年半くらいで変わった。カウンセラーの先生のおかげかな。」

Bさんは、自分自身も虐待を受けて育った経歴の持ち主である。子どもへの虐待を止めたいと自分自身で決心して、それ以来「手を挙げていない」とインタビューの中で語ってくれた。子どもとの関わりの変化は第4回のプログラムの中で子どもとのやりとりで困っている事例を出した。

ロールプレイで実際に子どもになってみて子どもの気持ちが分かり、自分のコミュニケーションパターンに気付く場面があった。それ以後、実際に日常の中で意識的にパターンを変える事を試みている。子どもと力関係ではなく、対等な関係を意識することは関係性に変化をもたらしている。プログラムをきっかけに子ども

とのコミュニケーションスキルを学び、実際に実行することで体得している。

②コミュニケーションの変化

1さんのインタビュー（2009年10月1日）仕事をもつ母親

1さんは地方の出身のため方言による壁を感じていた。

「ここに慣れるのには、すごくエネルギーが要りました。『どうしよう』と思いながらどきどきして、言葉が違うし、喋るのがこわい。透明の壁があるような感じ。よそ者と思われたらどうしようって。今思えば、色々な地域からこられているのも分かって、線路から向こうはこわくて、ここを越えたら帰れなくなるような気がして。慣れるきっかけは、ここの職員さんが買い物に連れて行って一歩を踏み出した。」

「プログラム受講の時は、ちょうど会社でゴチャゴチャがあった時で、でもイライラしてなかったのは、プログラムがあったからかな。帰ったら気分転換が出来ると考えていた」「普段は他の入所者と時間帯が全く合わないで、私が帰る頃は他の人は食事も終わっている感じで、しょっちゅう会うわけではないですね。顔見知り程度なので、プログラムの中で顔を合わせていっしょにゲームとかする中で、こんな方だったんだと思いました。終わってからはよく挨拶もするようになって、面白い人だなーと声かけもします。知り合いになりました。」

「ここにきて4年になりますが、喋るのも怖かった。そういう意味ではこのプログラムはありがたかった。人と付き合うきっかけになった。」

③ジェンダーの気付き

各々のインタビューで述べられた内容を以下に列挙する。

・「女性に生まれて不利益は、プログラム受講の時は思わなかったのですが、今はあると思う。社会での力は男性が上ですね。昔は結婚退職当たり前、長く居るといたたまれない。肩たたきは暗黙の了解。会社の中に入るとそんなには思わない。社会ではたしかにありますね。」

・「女の人で言い訳にしている人もいる。そんなに自分が無理をしなくても上に任せとけと。男の人に任せとけば考えなくていい。仕事に生きがいを持っていないから、あまえている。」

・「全部の女性ではないけれど、責任を持っている人はけむたがられている。女のくせにという言われ方をするから。『もうめんどくさいから黙っておこう』となるとますます男社会になってしまう。」

・「男が変われよ、男が変われば解決する。男は甘えていると思う。男だからと優遇されている。」

・「仕事にしても、女性の扱いにしても、暴力で逃げてきたんですけど、相手方から養育費をもらっている人もいない人もいますが、お金のないふりをして払わない人もいますし、体にも暴力で怪我をさせられたり、不利益ですよ。下女扱い。子どもが生まれて相手の親とペースが違う。夜中も起きて、5時6時に起きてだんなの弁当を作っても、舅姑は7時8時に食事して、あと片づけを終えたら子どもが眠くなる、掃除は毎日しなければいけない、一日や二日はいいじゃないのと思っても許されない。当然嫁がやる。」

④自己肯定感

Gさんのインタビュー（2009年10月5日）

Gさんはインタビューの時、丁度仕事を辞めたところであった。

「自分のことは割とわかるけど、子どものことで悩みがあって、子どもはほんとに思いどおりにならなくて、教育相談にもいってありますが・・・まあ不登校です。すごくそれに悩んで振り回される。仕事を辞める原因の一つです。何かしてあげた方がいいのか、仕事をしていると、家を出てしまったらもうどうしているのかわからないし、早く終わって帰るようにもしたけど、でも朝、身体がしんどいと言われたらどうしたらいいか。仕事をやめた原因は、子どものことが大きいです。ここにいたら少々生活が苦しくてもなんとかやっていけると思っています。だけどここを出るとなれば、なにもかもやらなければいけないので、相当頑張らないといけない。かなり悩んだけど、子どもには学校に近いほうがいいのかなと思っています。」

施設に入ったときに決めた目的は、ひとつずつ片付いている。お金は、マイナスではないけどやはり厳しい。前の会社の給料が2カ月分遅れているので、今月はまだ余裕がある。失業保険は5カ月またないと、ただハローワークに行く暇がないです。

実は、私も看護師を目指して学校へ行こうと思っています。今までの仕事は、ヘルパーもやっていたけど子どもを育てるにはきつい。受験のために今日、問題集買ってきたけど、高校受験の数学。さっき勉強したけど問題の意味もわからない。子どもと一緒に勉強するのもいいかな。何も資格を持っていないので、何か資格が無いと老後が心配」

インタビューではプログラム受講の時よりもさらに一人ひとりがそれぞれに抱える課題を聴くことが出来た。

8. 支援者の変化

母子指導員とは、本エンパワメントプログラムの事前打ち合わせから関わり、母親の参加募集にも協力をしてもらった。さらにプログラムに参加して振り返りや検証もお願いしたが、プログラムを実施する中で支援者自身にも変化が起きている。

第1回目0歳から2歳の子どもをもつ母親対象のプログラムに参加した20代の母子指導員は、「あのお母さんがあんなふうには笑顔を見せるなんて、大きな発見です。事務所で鍵の受け渡しだけではわからなかったお母さんの気持ちが、ベアになって話すことで伝わってきました。」「自分のコミュニケーションのパターンは間髪をいれずに話す。人によっては間が空いても平気な人や、ゆっくり間を空けながら話したい人がいるのがわかった。自分の対応は、間が空くと気持ちが焦っている。これからはお母さんの話をゆっくり聴こうと思う。」

第2回目学童期の子どもの母親対象のプログラムに参加した男性の母子指導員は、昨年度までは学童の少年指導員をしていたので、子どもの様子をよく把握している。「あの子どもとこのお母さん、すべてが見事にマッチしていますね。お母さんの変化がすぐに子どもに表れる。お母さんのちょっとした変化も子どもは敏感に感じて、お母さんの変化は子どもの安定にとっても影響しています」「5回のプログラムの中でお母さんがお互いに信頼し、変化していくのがよくわかった。否定をされないで受容されたと感じた時に、感情が湧きあがる。お母さんの力とエネルギーを物凄

く感じました。』

支援者も又、相互の関わりの中で母親の違った一面を発見することとなり、プログラム受講以前より母親を信頼し、親近感を覚える事によってこれまで行っていた支援を捉え直している。

9. 考察

母子生活支援施設における母親のエンパワメントプログラムの実施は、母親の学習機会であった。また自分が生活をしている場における学びは、学んだことを実行する機会にもなった。

今回の実践のように、参加型学習の形態で学習を経験するのは、参加したすべての母親にとって初めての経験となった。同じプログラムでありながら、参加するメンバー構成によって全く違う反応が見られたことは非常に興味深いことであった。参加者によるプログラムの中の発言や、アンケートにも新鮮な驚きや喜びを表す言葉や記述が見られたが、参加した支援者も多くの気付きを得るきっかけになった。

30代女性の指導員は、参加した母親からほめられたことで自信を取り戻し大人になってほめられ受容される重要性に気づいたことで、自身の支援の在り方を問い直すきっかけになったという。

しかし、募集において母子指導員はかなりの努力をした。自ら参加を表明した母親は少なく、指導員から声をかけることで集まった人の方が多かったからである。中にはグループが苦手、と断る人もいて、職場では人間関係を保っていても、施設内では他の利用者と距離を置きたいと考えている人もいる。

他には夕方子どもを一人にしたくない、という理由で参加を断る人もいた。参加を決めたものの実際にゲームをする場面で、「こういうノリにはついていけない、座っていいですか」と3回目以降は不参加になった人もいた。一人ひとりの状況をよく把握した上でプログラムは提供されなければならない。

4名の母子指導員は20代女性、20代男性、30代女性が2名である。それぞれがいずれかのルールに参加している。長年母子指導員をしている女性は回を重ねて、互いに力を引き出しあいエネルギーギッシュになっていく参加者の姿を見て、集団の力の素晴らしさと同時に怖さも感じている。この力がマイナスに流れないように、整理して行くのが指導員の役割であると述べる。さらに、参加者の変化を明確な手ごたえとして感じているのではなく、一つの体験に過ぎないとの指摘もあった。

このプログラムの目的である施設内の孤立感を払拭すること、子育てを少しでも楽にするきっかけを得ること、自己肯定感を取り戻す事に関連しては参加者のアンケートや、インタビュー、またプログラムの中でも本人の言葉にいくらかは表されているが、はたしてこの度のプログラムを受講することは、本人が主体として参加することになっていただろうか。施設外のプログラムの参加においても、誰かに勧められてということはあるだろう、しかし概ね自分が参加を決意する。本プログラムにおいて2名は自ら参加を表明したが、残りの参加者は指導員に勧められての参加である。自らが学びたいというよりは与えられた学習機会であった。

しかしながら既存のプログラムと大きく異なるところは、
・ファシリテーターが外部の人間ではなく常勤のカウンセラーで

あり、参加者とは顔見知りである。
・指導員も一参加者として参加する。
・指導員とファシリテーターは参加者の現状について相談が出来、また参加者のニーズに合わせてオーダーメイドでプログラムを組み立てられる。
・入所者を対象としているため参加者同士も顔見知りである。
・プログラム終了後も個別カウンセリングや指導員との関わりの中でフォローアップできる。
・参加者同士もプログラム終了後も共にフォローアップの可能性がある。などが挙げられる。

今後は、プログラムを受講した後の母親の変化を見守りつつ、一人ひとりのニーズに合わせたきめ細かい支援が必要と考えるが、あくまでも主体は母親である。母親自身が、自分の人生を前向きに捉えなおす必要がある。自分の人生をよりよくするために、人との関わりの中で自己選択、自己決定をしていく必要があるだろう。その為には、本人がその気持ちになる支援が必要になる。

子どもの不登校に悩んでいたGさんは、仕事を辞めて看護学校を受験した。きっかけはストレスフルな出来事であったが、その後試験に合格し、自分で決めた時期に退所となった。このケースが示唆するのは、自己への信頼である。離婚を子どもに申し訳なく思う一方自分の選択に対しては揺るがない。たまたまプログラム受講と時期が合致し、一歩を踏み出すきっかけの一助となった。

しかしながらDVや虐待、生活困窮の問題は複雑で、問題は重層的に生じているため、ある母親はプログラム受講時には自分の人生を前向きに捉え、自分の力を感じていたけれど、退所後は自分の健康問題などを抱え子育てに困難を感じている。

筆者(石崎)は、心理相談員という支援の一端を担う者として、A園の母子支援に関わり続けている。母親のエンパワメントプログラムを実施し、生活の場を学習機会の場としたことは新しい支援の在り方の試みであった。

プログラムは、日常生活支援、子育て支援、就労支援などのさまざまな支援から切り離されて実施されたのではなく、包括的支援の一部として実施された。今後も継続していく支援である。

今後の課題は、母親の意識覚醒がどのように本人の自己選択と自己決定に影響を及ぼすか、また子どもへの影響はどうかをみてゆく必要がある。また母親の抱える問題を個人的な問題と捉えるのではなく、シングルマザーの困難な状況を生み出しているのは、社会であると問題意識を持ち、支援の方向を模索していく必要があるだろう。

注

- 1 母子生活支援施設は、配偶者のない女子又はこれに準ずる事情にある女子及びその者の監護すべき児童を入所させて、これらの者を保護するとともに、これらの者の自立の促進のためにその生活を支援することを目的とする施設である。(改正) 児童福祉法第38条

参考文献

- 須藤八千代(2007).『母子寮と母子生活支援施設のあいだ』明石書店
A園(2009).『母子生活支援施設における就労支援の現状と課題』エリザベス・ハイズ ダニエル・D・フラネリー著 入江直子・

- 三輪健二(監訳) (2009). 『成人女性の学習』 鳳書房
- ジャニス・ウッド・キャタノ著 三沢直子(監修) 生島幸子(訳)
(2002). 『完璧な親なんていない!』 ひとなる書房
- エリザベス・クレアリー著 田上時子(訳) (2001). 『親を楽しむ
5つのスキル』 築地書館
- MYTREE ペアレンツプログラム報告書 (2005)
- NPO 法人 saya-saya H P (2013)
- L.M. グティエレス・R.J., パーソズ・E.O. コックス編著 小
松源助(監訳) (2000). 『ソーシャルワーク実践におけるエン
パワーメント』 相川書房
- パウロ・フレイレ著 小沢有作・楠原 彰・柿沼秀雄・伊藤 周
(訳) (1979). 『被抑圧者の教育学』 亜紀書房
- 植山つる児童福祉研究奨励基金 研究報告書 (2010). 『母子生活
支援施設における児童と母親のエンパワメントプログラムの実
践』
- 金井淑子 (2008). 『異なっている社会を』 明石書店
- 杉本貴代栄・森田明美 (2009). 『シングルマザーの暮らしと福祉
政策』 ミネルヴァ書房
- ジュディス・L・ハーマン著 中井久夫訳 (2001). 『心的外傷と
回復』 みすず書房